～地域が元気になるために社会資本ができること～

社会資本の整備と活用を通じた地域づくりフォーラムを開催しました。

今回は、基調スピーチをご紹介。田口さんが発するパワーと会場の熱気をお届けできないのが残念です。

ＮＰＯ法人田沢湖ふるさとふれあい協議会
理事長　　田口久義　氏

私どもは修学旅行の受け入れをしてちょうど今年で25年になるそうです。いわゆる四半世紀ということで、新聞など色々なところで取り上げていただいています。この岩手県には優秀な方や優秀な団体が沢山ありますが、その中で、山を越えた向こうから釣り上げていただいて今日来た所でございます。

私が今朝出るときには雪です。こちらに来たらこの天気です。いわゆる表日本と裏日本。これは後で出ますが、日本の国というのは自然の摂理というか、たいへんうまくやっているなと思っています。

こうして講演などを頼まれてきても、（聴講者は）普通でしたら農家民宿または農家宿泊あるいは体験農業の受け入れ農家、そういう受け入れ農家の人たちが多いんです。あるいはそういう関係の町村議会の人たちや、それを担っている行政の人たちが多いんです。

でも今日は、先程部長さんが言われましたように県庁の方もおられれば、色々な方が沢山。それぞれの団体の方、受け入れ農家の方も来られているようです。ですから皆さんに合わせた話になろうかと思いますが、すべてパーフェクトにというふうにはならないと思います。私の話の中からいくらかでも、少しでも自分達の役に立つ事があったならば役に立てるようにしてください。

どうしてこうなったのかということ、現在はどうなっているのか、我々がやっている都市農村交流は将来どうなるのか、その３つの視点に変えながら将来に向かって話したいと思います。

「元気の出る話をしてください」ということでしたが、元気が出るかどうか、皆さん聞いてお帰りになった後でそれぞれ自分の条件に合わせてみてください。

題は「新産業としての意識改革を」。これはこのレジュメの一番最後に出ています。今まで日本の農村が育んできたものを今また一番必要な教育という場面で、いわゆる文部科学省がそれを必要としています。

私どもの年代の小学校と中学校では春と秋には農業の休みということで１週間ほどの休みがありました。「田を持っている人たちは早く田植えを終わらせて学校へ出てきなさい。田圃のない方は手伝いに行って早く来い」というのがありました。岩手県もあったはずです。私どもの所もありました。勿論、秋の稲刈りもありました。ところが、私どもが高校へ入った頃にはそれは無くなってしまいましたね。

皆さんご存じのように、平成に入ってまもなく京都奈良での修学旅行の乱闘事件・学校同士の喧嘩がマスメディアを大変賑わせました。新聞も含めてテレビ・ラジオでやりました。特にその中でも東京町田市の忠生中学校。あの学校は高校も含めて大変に有名になりました。とにかく教室のドアや扉がないんですよ。大工さんが作ってもすぐ壊しちゃうというんです。たまたま私どもが体験学習を受け入れしだして、東京の方から「ちょっと見に来い」と言われ行ったんです。学校に行っても玄関から戸が無いんです。10月でしたね、私が行ったのは。「もう、寒くないんですか」と聞きました。東京はまだ 10 月は寒くないんですね。12月になったら戸は壊さないだろう。何故かというと寒くなるからというんです。そんなこんなで、見てきました。

平成５年に文部大臣の諮問機関から建議書が出ました。その建議書の中には日本の荒れた義務教育の欠陥として・・近い将来ということでしたけれど「総合学習という名前で、いわゆる１週間程度のボランティア活動か農林漁業体験を義務教育に入れる」という通達です。それが今回、それぞれの教育委員会あるいは学校の先生が大変悩んでおります「総合学習」の一環ですね。

私どもにとって大変近い岩手県ですが、今年の冬にまた冬季国体が秋田で開かれます。これが都合４回目です。第１回は昭和 46 年に開催されました。その年には県境にあります駒ヶ岳が噴火しまして体協関係の方達がたいへん気を揉んだ古い記憶があると思います。

昭和 46 年に国体を行いました。そのとき田沢湖高原というのは宿泊施設が少なくて、ほんの数百人、300 人ちょっとしか宿泊施設がなかったんです。選手・役員で数千人が来るということで、地元の農家にターゲット・・いわゆる白羽の矢が立ちました。私の家もそのうちの一軒でした。

日本の国というのは今までずっと神道の国で来て、冠婚葬祭は自分の家でやることを続けてきた。岩手県もそうです。そういうことから座敷が非常に広いんですね。一軒の家で、多いところで15人くらい、あるいは７～８人くらい。100 軒近い農家が協力して国体を乗り切った経緯があります。

その結果、色々と予約などが入りました。たまたま昭和46年の12月の21日付で私の家が所轄保健所の許可をいただきました。あの頃は「季節営業でやりなさい」ということで、いわゆる民宿の走りでしたが許可をいただきました。それから大体２年で３軒。10 年くらいした頃には 40 軒近い民宿が開業致しました。

民宿といっても、私どもは農家をやって米あるいは野菜を作っていた人がコロリ 180 度変わって今度は接客業でし

ょう。まあ、これは大変なんですよね。やられている方はわかると思うんですが。

そして10年後には軒数が40軒近くなりました。実は無我夢中で10年くらいやっていましたが、たまたま昭和57年にこの盛岡駅と大宮の新幹線の暫定開業になりました。それと同時に首都圏からスキー修学旅行の話が入ってきたんですね。勿論ここから見える場所、スキー場は沢山あります。こちらの網張温泉でもやっておりました。私どもの方へも話が入りました。

たまたま私は、昭和46年の国体が終わった次の47年から、すぐ裏側の田沢湖スキー場220ヘクタール・・あの頃は面積は日本で3カ所のうちの3番目だったんですけれど・・そこでスキー学校をやっていました。その話を断ったらもう二度と無いということで受け入れました。横浜の高校でした。受け入れましたら2年3年後には倍々で増えていきました。

3年目くらいからですから昭和59年、60年頃から「冬の間にスキー修学旅行をやったなら、夏の間にも何かやりたいけれど何か良いのがありませんか」という話をしている間に、「田植えをして欲しい」という学校が首都圏から出ました。これも断ったら二度と無いということで受け入れました。6軒の農家で146人です。

皆さん、田沢湖に行く途中に手前の46号線で通るところがあります。あの辺が私どもの集落です。石上地区という所です。そこで私が受けまして6軒の農家にお願いしたんです。なんとかかんとかやったんですが、これが怒られましてね。まず怒られたのが農業委員会。役場の農林課。農協です。

行政の方がここにいますが、あの頃は減反の走りなんですね。もう米が余っている。日本の国は輸出しようにも高くて買うところがない。だから減反減反で「米を植えるな」ということなんですね。それなのに今度は修学旅行を連れてきて田植えをさせたでしょう。

次の年には農業委員会、農協、それから行政・・町村合併前ですから旧田沢湖町の役場です。そこへ行って何とか了解を得ました。そうしたら1年目に来た学校が横浜で、地元のテレビ局が30分の番組編成で2年目の体験学習を放送したらしいんです。こちらの方には映らなかったんですが、そうしたら倍々倍で増えました。横浜の学校が15校くらい来ました。

昭和46年から民宿をやって57年の新幹線の開業と同時に修学旅行が入ってきまして、断らずに受け入れたのがなんとかかんとか功を奏しました。その部分が先程部長さんが言われたいわゆる社会資本になるのかなと思います。というのは全然経験のない農家の人がお客さんを受け入れ、宿泊をさせて接客をするという部分です。

私どもが民宿をやってこうして25年と言いましたが、平成9年頃から大学の卒論のテーマにグリーツーリズムを取り上げる生徒が増えました。どういうわけかポツリポツリと平成8年、9年頃から来るようになりました。平成12年には9人来ました。その中の6人が女の子です。彼ら彼女らが同じことを言うんですね。「私たち、グリーツーリズムをやりたくて大学を探したけれど入る大学がなかった」と言うんです。どういう所かを調べたら、札幌には観光学科の大学がありますが・・今は増えてきていますよ。立教もあります、横浜商科大は羽田教授が頑張っています・・今はポツリポツリ増えていますが、あの頃は「無かった」と言うんです。

「農林省に電話した、こっちへ連絡した」って言う。田沢湖町の有名なわらび座さんをご存じでしょう。あそこで私どもの所を紹介されたということで何十人も来ました。平成12年に私の所に来たのは9人でした。女の子が6人。今は色々なところでそれぞれやっています。国連に就職してやっている方、九州におられる方、長野の観光公社観光課に就職された方もいます。

そういうことを考えてみますと・・これは最後の話になっちゃうんですけれど・・これは、川上産業でもないんですね。川中、川下でもないんです。いわゆる隙間産業かというとそうでもない。日本の国はものすごい財閥がいっぱいいます。旧財閥・新財閥と分けているそうですが、彼らがやれるかというとやれないんですね。日本で一番ベッド数があるプリンスホテル。26000ベッドあったそうです。あそこに営業本部長という方がいまして、その方とお会いすることがありました。そのことを聞きましたら、無理って言うんです。じゃあ古い旅館、ホテル、老舗がやれるかというと、それも無理という。「これはいわゆる新産業として認識が必要ですよ」ということで、平成9年頃から私どもが東京のある団体に何度も呼ばれ、そういう所で訴えて参りました。

その結果「オーライ！ニッポン会議」というところを小泉総理が立ち上げて、岩手県からも何団体か来ましたが、そういう方達で国で一元化管理をするということで進めております。大変有名な養老孟司さんを一番上に据えました。あの方はちょうど東大の脳神経の解剖学か何かを退官されるということから「じゃあ、あの人がいいでしょう」ということで。それから、平野啓子キャスター、それから伊藤忠商事の丹羽宇一郎さんを実行委員長にしました。ようやく立ち上がって3年ぐらいで、今動いているところです。

そういうことで私どもが進めて参りましたが、平成5年6年の頃から倍倍々で増えまして10校15校20校を越えました。今もそうですが、この世界はマスメディアの通用しない世界です。たとえば安比にスキー場を作ってテレビ・ラジオのいわゆる電気メディアでダダダーッと放送するとスキー場にはお客さんが集まってきます。ところが学校の先生、修学旅行・義務教育、言うならば聖なる世界でしょうね。この世界にはマスメディアは通用しないですよね。「修学旅行、北東北へどうぞー！ダダダーッ」とやっても来ないですよね。

学校の先生は色々なところを探しているんですね。今までは神社仏閣、観光地、名所旧跡、北海道だ、九州だ。色々なところを探しましたが、やはり子ども達が体験学習をやったら学校に帰ってから子ども達の校風が変わっちゃった

と言うんです。その始まりが神戸のスキー修学旅行。これは昭和40年代に始めております。今ではその高校は卒業したＯＢが自分の母校の修学旅行のインストラクターとして信州に来ています。あれが走りでした。約32～33年か34～35年前ですそれが関西で爆発的に飛び火しまして、それから約10年後、関東に移りました。

関東の学校がスキー修学旅行をやり始めた頃には信州・新潟、あの辺は関西の学校でいっぱいになりまして、志賀高原なんかはパンク状態です。志賀高原は修学旅行を一時期300校近く受け入れしたら、もう一般のお客さんが来なくなっちゃったんですね。修学旅行生はいわゆる「カラスの軍団」と名前を付けられました。今は志賀高原全体で200校以上は取りませんということで毎年すりあわせをします。勿論旅行業者を含めてです。特に集中するのがタンネの森周辺です。

皆さんご存じのように志賀高原というのは20近いスキー場があるんですよ。その中にもスキー学校がＳＩＡ、ＳＩＪ含めて30数校あります。ＳＩＡの場合はホテルに入っていますがＳＩＪの場合は広く広域的にやっています。そんなところで大体200校です。特に来るのは四国、九州、関西です。九州とか関西の学校は志賀高原には行きたいわけです。ところが前に行っていた学校が何か不祥事を起こさないと次の学校が入れないわけですよ。不祥事ということは事故か事件なんですよね。そんな状況でいっぱいになっていて信州やそういう所に行かれないわけです。ですから自ずと東北へということでやって参りました。

57年の新幹線の大宮一盛岡の暫定開業というのはものすごいインパクトがありました。盛岡の駅前は１月の10日から２月の20日までは大型バスが多い日には40台から50台入っているのをこの辺の周辺の人たちはみんな知っています。「この子達はどこへ行くの？」まず岩手県ですね。やってもキャパがないわけです。それで峠を越えてわざわざ田沢湖まで来られたんですね。学校数はもちろん最初は１校でした。昭和57年に話がありまして58年から実施し、一番多いときには田沢湖に来たのは55校でした。志賀高原が200校でしょう。田沢湖が一番多いのが55校。蔵王という有名なスキー場がありますが、あのスキー場で多いときで15～16校なんです。そんな状況でどれくらいの規模の学校がどれくらい来たかというのは、後はご想像できると思います。

公立高校の場合はクラスの１学級が40名です。最高でクラスが12クラスです。そうすると１年の時に40名一クラスですが、入学は44人か45人取るんですね。３年生で卒業するまでに40人になればいいということで取るそうなんです。ところが子ども達は丁寧に３年になるんですね。すると550人くらいになるんですよ。12クラス550人というと、ここから一クラス来るとバス12台出ます。その学校が私どもの所へ４校から６校入っていました。ということはバスが12台が４校来ると50台近いでしょう。それが田沢湖に来るんです。

ところがここでは網張もありました。それから裏にもありました。それから鉛温泉もありました。それから少し遠いんですけれど安比にもバスがここから出たんですね。雫石さんも「修学旅行はうちは取らなくてもいい」ということでスキー場経営されていましたが、とうとうトレンドには負けて「じゃあ、取りましょう」ということになりました。

そんなことで一時期のブームという形になって今は処理されています。なんでそうなって今は少ないかというと、公立高校の場合は距離と宿泊数とお金の問題があります。それに新幹線しかダメだったんですね。それが飛行機が解禁になり良くなったんです。それで北東北に来ていた学校がワーッと北海道に行っちゃったんです。新千歳に修学旅行の飛行機が行くようになりました。平成６年でしたか突然ガクンと東北地方が減りました。

そうしましたらやはり文科省では、「一つの飛行機に一つの学校、学年が乗ってはダメだ。２機の飛行機に半分ずつ分乗させなさい」と２年後に通達を出したんです。どういう事かというと、飛行機が１機落ちちゃうと、その学校の１学年がいなくなっちゃうということなんですよ。それで２年後にはもう半分にまた減ってこっちに帰ってきましたね。帰ってきましたら今度は子どもの数が減っちゃった。今は少子化少子化といわれていますが20年前からそれは統計で出ていまして、「平成10年にはかなり減りますよ」と言うことで、私どもはそれに合わせた形で計画は組んでいました。

そういうことで、今は閉鎖されているスキー場がかなりあります。田沢湖高原も４つありました。一番奥の乳頭休暇村は閉鎖です。それから田沢湖高原も今年から閉鎖です。手前の２つだけの営業という形になっています。それから日本のスキー場は新潟、長野の大糸線沿線、上越線沿線、信越線沿線に大体85パーセントがありました。一つの駅に３つくらいあったんです。それが今大体半分以下になっています。これが正常なスキー産業としての流れかなと思わずにいられなくなりましたが。

本題の「グリーンツーリズム」の方へ移ります。

私どもがやっていた頃は「グリーンツーリズム」ではなく「体験学習」という名前だったんです。それが、文部大臣の諮問機関から出た建議書を境にしまして、文科省で何年か後には総合学習という形で１週間程度のボランティア活動か農林漁業体験を義務づけるという事で通達を出しました。それと同時に流れとして、マスメディアが作った言葉と言っていますが「グリーンツーリズム」という言葉が大変聞こえが良く出てきたんですね。ですから大体平成７年頃から「グリーンツーリズム」という名前になって、それが主流を占めるようになってきました。ところがそこに大きな誤解がありまして、「グリーンツーリズム」というのはやはりヨーロッパ、欧米の方から入って来た言葉ですが、向こうの方へ行くと体験がないんですよね。ドイツもイギリスもフランスも体験ということが入ってこないんです。ツーリズム・観光はあるんです。フランスに行ったらルーランとか色々なのがありました。軒数を調べても、イギリ

スなどはまだ4,000軒。ドイツで24,000くらい。フランスが今60,000軒越えました。ただフランスの場合平成12年に行ったときには55,000軒でした。それが5年くらいの間に60,000軒を越えちゃっているんですね。

フランスの場合はツーリズムといのはいわゆる観光の部分が多いですね。世界で一番観光客が行っているところがフランスなんですね。日本は外貨獲得を、昭和36年の所得倍増計画で工業立国ということで閣議決定してドンドンイケイケで進んできたんです。それで外貨を獲得して、こんなに豊かにはなっているんでしょう。ところがフランスなどの場合は外貨獲得を観光の部分に持ってきています。オーストリアなんかは観光省というのがあります。スイスもそうです。そういう意味では軒数を見ましてもドイツの場合はいわゆる地味な形でやられています。大きな違いというのはフランスはツーリズムの部分が多かったです。

平成10年から12年の間、たった2年の間に50,000軒あったフランスの農家民宿が55,000軒になっていますね。10パーセント増えました。そして更に既存の民宿が1,000室増室しています。ヨーロッパはヨーロッパでそういう流れがあります。

話を戻しますと日本の場合は農家民宿・農家宿泊、大分県なんかは農泊といっています。農村で体験学習や農林漁業体験をしようとして宿泊する場合・・東京の大きなホテルがありますね。そういうところの宿泊の建築基準法と消防法と食品衛生法の法律の網が日本の農村の田舎でも同じく掛かっちゃうんです。「それが大変問題ですよ」ということで私どもは平成8年9年から、呼ばれた会議などでものすごく訴えてきました。

そうしましたらここ5～6年のあいだの小泉さんの規制緩和政策で、岩手県の遠野もどぶろく特区を取っていますが、色々な規制緩和がされました。北東北、特に岩手県・秋田県・青森県が歩調を合わせて行政の方達が頑張って県としての法の解釈・指針を作ってくださり、まず誰でもやれるようになりました。個人では無理ですけれどね。国は国としての規制緩和、県は県としての指針あるいは条例の改正ということで、今は進めていただいております。

そういう意味では、先程部長さんが言いました社会資本、行政・・昔は産官学といわれていましたが・・そういうところの歩調というのは合って進んでいるのではないかなと思います。青森県は青森県で今やっています。そういう意味では大変結構なことだなと思って私どもは歓迎しているところです。

今、私どもが体験学習ということでやっていましたら、46年から大体10年を目途に57年の次の国体。この時にはもうすでに田沢湖高原一帯は800人、1,000人近く宿泊できるホテルが4棟5棟と建ちました。あの時は無事にホテル関係で国体を乗り切りました。次の国体は鹿角一本ということで鹿角市が全部それをやりました。

今回つまり来年度の19年国体は、実は行財政改革を推し進められまして「公的な宿泊施設は固定資産税も払っていないんだから民間のホテルなどとは違う、だから廃止しなさい」ということで、だいぶ強く圧力団体が出ました。その結果、田沢湖町にありました町営のこまくさ荘は廃業しました。それから県の共済組合でやっていました田沢湖ハイツというのも廃業しました。簡保の宿、これも建てたばっかりなんですがまもなく営業を終わる。これは私どもの所だけではなくて全国的な流れだそうで、やはり宿泊数が少なくなってきているんですね。そうすると「今年の国体にはまた農家民宿をお願いします」ということでまた何十軒か、そういう形で今進んでおります。下へ戻ったと言ったら変ですけれど、ある意味ではグレードが上がって元に戻るのはいいんですが、成熟してというのならいいんですが・・。まあ、そういう状況です。

今度は農家民宿の本題に入ります。マスメディアの通用しない学校の修学旅行という世界。私どもが中学・高校のころは田舎者が首都圏の雑踏を見に行くものだという理解しかなかったんですよ。ところが、それが話が逆になって都会から農村に来る。こんな事あり得るのかなと思っていたんですが、彼らは終戦後の子どもです。昭和30年～40年代後半に産まれた子供達が日本の農村に来て、いわゆる昭和36年のイケイケドンドンの日本の高度経済成長で外貨獲得をして、都会で育った子ども達が農村に来て目が輝いて帰っていくんですよ。マスメディアの通用しない世界です。どうしてそういう世界に入っていったか。これは言い方を変えると、どうも見ていると先生方の特殊なネットワークというのがあるようなんですね。

もう一つは、修学旅行の主役は旅行社でもなく先生でもなく、やはり子ども達が主役だったということなんです。

どういう事かというと、色々な修学旅行が発生する段階で、私たちが旅行社あるいは学校の先生方と掛け合いをします。学校の先生方は農村の、農家のありのままの姿を求めてくるんです。そこに法律の網が被ります。例えば「トイレはすべて水洗でなければダメだ」。消防法ですと「誘導灯を全部つけなさい」。そして建坪が木造で150坪になりますと「スプリンクラーをつけなさい」。ところががその投資額たるやものすごいものなんですよ。まずそれで農家は「もうやめました、だめです」。それが第一のバリアです。もう一つありまして、農家の人にお願いに行きます。「こういう学校が来るんだけれどお願いします」というと、まず女の方が出てきます。食事の準備しますよね。同じことを言うんです。大体年代が50代から60代後半の方達です。どういうことかというと、こう言うんです。「まず、盆と正月に小姑方が来るのだけで沢山だ」と言うんです。それが第二のバリアでした。

ところがそれが最近少しずつ変わりました。原因は色々あります。まず今まで日本の国というのは米が一番の軸足でした。その値段が下がったというのはサラリーマンでいうと給料が下がることなんですよね。昭和60年、日本の国で一番、米が高く売れました。私たちは「あきたこまち」を作っていましたが1俵60キロ22,000円で売れました。そうしたら平成11年か12年に東北でカメムシ冷害という

のがありました。その時に1俵11,800円でした。私はたまたま昭和60年と平成12年に同じ面積を作っていたんです。昭和60年と12年で比較しました。農協の指導課に計算をしていただきましたら42パーセント減なんです。サラリーマンの給料が半分下がっちゃったような状態なんですね。それでも農家というのは米が高い時代にどっぷりぬるま湯に浸かっていて、第二の軸足というのを考えなかったんですね。

ところが、考えた方もいっぱいいるんです。岩手県の方達もいっぱいいました。安代のリンドウだとか、いくつか回って歩きました。秋田にもありました。その中でも私どもの大曲・仙北地区というのは大穀倉地帯です。今、農協合併の結果3万人の組合員で日本一になりました。ところが組合員は日本一でも農家の借金も日本一になっちゃったんですよ。

そういう形で一つの軸足、米しかなかったものが「じゃあ、次の」となるとなかなか踏み出せないんです。たまたまそこに私どもが昭和46年の国体の副産物として残った農家民宿、いわゆる民泊。「それは他ではやっていない、秋田の田沢湖しかやっていない」ということになったんですね。今年で25年といいましすけれど、ちょうど10年10年スパンで、いわゆるバリアを飛び越えるチャンスといいますか・・それは皆さんのやる気がなければダメですけれど・・そういうことがありました。

最初の10年というのは、修学旅行が増えてきたということです。二つ目は、私どものＮＰＯという法人化の問題です。行政さんの役目は、民間の人たちの手を引っ張り上げてレールに乗せて、レールの上を走らせることだと私は考えていました。

都会の子ども達・先生が求めてくるものは日本の農家のありのままの姿なんですよ。ところが法律の網が被る。

一つこういう事件を想定しました。農家の家に都会の中学生・高校生5人くらい泊めました。たまたまその農家が火災にあった。子ども達5人亡くなっちゃった。どうします？いわゆるリスクマネジメントです。私が代表をやれということでやらされていましたので、考えるのはそういうことしかないんですね。「修学旅行が突然来なくなったらどうしよう。何でこうして来るんだろう」。あるいは「事件・事故が起きたらどうしたらいいだろう」。

日本の国家は法治国家でそういうところには立派にいろんな保険制度があります。今も覚えていますが、平成9年大蔵省の保険局に電話をしました。4回か5回電話しました。その担当者の若い人がこう言うんですね。「今、日本の国で農家に泊まって火災が起きても事故が起きても、そういう保険は認可もしていませんし発売もしていません」と。これは当たり前のことなんですね。「じゃあ、どうしたらいいんでしょう」と聞いたんですね。そうしたら「その組織を法人化しなさい」と。

法人化というのは考えてみたら利益追求の会社は色々あります。合弁・合資・有限。あるいは社会福祉法人・学校法人、色々あります。やはり適当と思われたのは公益法人ですよね。そうしましたら「自民党本部で非営利特定促進法の検討会をやっている。まもなく世に出るので、それを検討したらどうか」という話が出ました。

次の年、1998年3月19日の国会を通過しましてその年の12月1日に世に出ました。それをインターネットで引っ張ってみたら誠に都合が良いんですよね。まず資本金がいらないんですよ。私どものように事務所を秋田県に置くのであれば県庁に申請書を出す。あとはやることは会社と同じなんですよ。そしてそれが銀行口座も持てる。財産、土地も持てる。「体験学習の子ども達が怪我をした。事件を起こした、事故を起こした」という場合もカバーされる保険も今出ております。

そしたらまた良いことに、田沢湖町では最初のＮＰＯ法人なので、町長が「どこか一部屋を事務所に使え」ということで一部屋貸していただきました。合併して仙北市になりましたが、他のＮＰＯに羨ましがられています。

そんなことで、大蔵省の保険局のアドバイスと、私どもやっているものに合うような形に世が進んできたんでしょうね。そう思わざるを得ないんです。それと同時に修学旅行が倍倍々に増えまして、平成10年から12年にかけては受け入れ学校数が30校前後です。そして断る学校がその倍から3倍でした。

実は今日もこうして岩手県さんにお邪魔していますが、平成10年の頃から青森県、山形県、勿論この岩手県も含めて福島だとか、そういう所から「修学旅行を受け入れについて話をしてください」と言われるようになりました。しかし、秋田県では全然掴んでいなかったそうなんです。たまたま平成7年に東京都北区の教育委員会から「田沢湖に修学旅行に行っているんだけれど断られる学校が多いので、何とか県の方で善処して欲しい」という申し入れが県の観光連盟と教育委員会にあったそうです。それを調べましたらわらび座だったそうです。

今から4年前です。今度は東京の大田区の教育委員会からたまたま私の家に電話がありました。朝です。「今、大田区の教育委員会をやっているけれど、明日（私に）家にいて下さい」というんです。「うちの指導主事を1番の新幹線でやるので11時頃に着くはずなのでいてください」という。北海道出身の指導主事の方が来たんです。大田区の六郷中学校を私たちは前年に受け入れていたんですが、「大田区の区立の学校を全部田沢湖でやってほしい」と言うんです。「何校あるんですか」と言ったら38校あると言うんです。断ったらしゃくに障るので「じゃあ、やりましょう。ただ条件があります」と。修学旅行はグリーン期の5月から6月の第1週くらいまでがバーッと込むんですよ。ＪＲも修学旅行列車というのを出すんです。その抽選もあるんですがね。「5月6月はダメです。9月から11月なら良いですよ」と言った。そして今年からポツポツ来ています。

県の観光連盟や教育委員会も状況を掴んでいなくて、照会がきました。「過去にやったものを見せてください」という事なんですね。いわゆる行政が後手後手になっちゃったということなんですね。

皆さんご存じのわらび座とは、私どもはしっかり毎年すり合わせをしています。垣根もしっかり持っています。一つがダメなら２つも３つも持っています。同じ田沢湖町、今は仙北市になりましたが、そういう形で峠を越えたこちらの雫石さんとも色々な形で話し合いもしながら進めているのが現状です。

これからこの世界・この分野がどうなるかというと、先程言ったように大企業も無理、財閥も無理、大きなホテルも無理、湯治場も無理なんです。ということは新産業として認識をしてということです。これも昨年、自民党の武部幹事長に「新産業として認識してください」と言ってきました。「新産業として認識するのであれば新しい法の整備が必要でしょう」ということでまた「オーライ！ニッポン会議」を中心に細則の作業に入っているようです。

そんなことで帰ってきましたら農家の親父であきたこまちを作っています。20年前までは政府米を作っていたんですよ。今は自主流通米です。

ではこれからどうなるのか。これから元気の出る話になるかと思うんですが、先程言いました欧米です。結局ルーツを調べますと欧米の方が古くからやられているんですね。ドイツ・フランス・イギリス。イギリスは去年行った時で4,000軒くらいだけれど無認可でやっている人もいるようですね。無認可という言葉を出して今話をしましたが若干の法の規制を言いますと、フランス・ドイツなどは２日間の講習で「はい、どうぞ」なんです。ベッドが５つまでは２日間の講習。女の方がいて講習を受けて帰ってきて「はい、やりますよ」。25ベッドでしたか、詳しい数字は今年はちょっとわからないんですが、それ以上になると、今度は州の許可がもらえます。そういう形でドイツ・フランス・オーストリア・スイスなども若干違います。

何よりも一番大きな違いというのは、向こうの方の歴史を調べますと、グリーンツーリズムという前に休暇なんですね。ドイツの場合は昔、戦争に行った兵隊の休みを農家で休ませたんです。フランスもそうでした。そこに大きな違いがあります。例えば日本の場合、お医者さんに行って「うつ病」と診断されます。処方箋が出ます。ドイツもフランスもそうですが、「あなたはどこどこの農家民宿に行って３ヶ月あるいは６ヶ月療養しなさい」というと、その農家に行ってその人が療養するわけです。１ヶ月に３回とか、１週間に１回ずつ病院と往復する。それにしっかり医療保険が支払われるんです。日本ではまだまだでしょう。

それから農家民宿をやるとなると、大体国によって違いますが、35パーセントから47パーセントくらいの補助金が出ます。出る場所は３カ所から出ます。１カ所がＥＵのブリュッセルの本部から出ます。もう１カ所は各国から出ます。もう一つは各国の州から出ます。いわゆるその３カ所から出ます。微妙な違いがありますが３カ所から出ます。それからどの国も新築は一切ダメです。新しく全部というのはダメなんです。古い農具舎、あるいは古い家畜舎、そういう所を改造した物に関してはＯＫという助成金が出ます。

細かい規制がいっぱいありますが、大きな違いがありました。日本の場合は、旅館もホテルも農家民宿も、小動物いわゆる牛・馬、こういうものがダメなんですね。羊もダメ。ところがヨーロッパの場合は「小動物を飼いなさい」ということなんです。日本の厚生省の言い分は、「動物は人が持っていない細菌をいっぱい持っているからダメなんですよ」。私もそれはそうだと思います。ところが向こうの場合は、いわゆる医療保険を支払うということで「うつ病の患者に対して一番の癒しになるのが小動物だ」と言うんですね。向こうのお医者さんが言うのはね。その辺のところが日本と大きな違いがあるんだなあと思います。いわゆる許認可基準ですね。

更に大きく違う部分は、大学の卒論を書く生徒達が言うには「グリーンツーリズムの本を色々なところから買いあさって読むんだけれど、ほとんどがヨーロッパの本だ」と言うんです。大島順子さんという方がフランスにいまして、訳して全部日本に本を送っています。今、秋田農業短期大学から遠野で東北グリーンツーリズムスタッフミーティングというのを立ち上げた青木さん。この方は昨年ロンドンに１年行ってこられましたが、あの方もやはりクラインガルテンは向こうの方が主体で、訳した物が多いんですね。

ではこれからは日本ではどのようにということになると、先程言った表日本、裏日本の話じゃないんですけれど、内需拡大ということです。例えばＥＵの場合、ドイツにアウトバーンという有名な高速道路があります。あのアウトバーンがＥＵ連合をやって国境のゲートを取った途端に外国車ナンバーが30パーセント以上増えたと言うんです。たまに渋滞が起こると言うんです、あのアウトバーンで。

「これ以上に渋滞がおこったら料金を取ろうか」なんてやっていると言うんです。去年行ったときはまだ取っていませんでしたが。

ところが日本の場合は内需拡大ということでＥＵのように連合を組んでも、アジア連合というふうにしても、朝鮮・中国・台湾が一緒にやっても、日本はどうにもならないんですよね。回りが全部海ですから。結局は内需拡大なんですよね。たまたま良いことに、表日本と裏日本があるから表と裏の交流がいいんじゃないかなと私は細々と思っている一人なんですよ。

今、大体、日本の行財政改革が終わりました。昭和36年のイケイケドンドン・高度経済成長・所得倍増計画が大体終わりました。行政があまりにも贅肉がありすぎてそれをそぎ落とそうということで行財政改革。そのターゲットになったのがいわゆる３公社５現業で最後まで残ったのが郵政でしょう。最初の頃にやったのが電電公社。

あの頃のＮＴＴの電話料金は日本の国全体で５兆円使われていたそうです。そのうちの３兆円がなんと東京と大阪の間、関東・京阪神で使われていたそうです。ということはあそこら辺にお金が集中している、いわゆる雪の降らない表日本なんですね。だったら雪の降る裏日本へ人の交流をするということが大事かと思います。人の交流ということは人が動けば経費が付いて回ります。ということは世の

中が活性化します。ということで農家が第二の軸足をその辺に少し移してもいいんじゃないかなとは思っているんですがね。

ということで、３年～４年ぐらい前から北東北の連合ということで、この岩手県さん、秋田、それから青森さんが北東北観光連合という色々なものが立ち上がっています。そういうことは私は大変歓迎はしています。足並みを揃えて首都圏・京阪神のほうに売り込むという事がすごく大事かと思います。

今、秋田の場合は韓国・台湾のお客さんが田沢湖高原の温泉地帯に大変訪れています。昨年、有名になりました鶴の湯が雪崩でやられました。その時にお湯に入っていた人が何人かいたんですね。そこに助けに行ったそうです。そしたら全然なにも喋らない。「痛いですか、大丈夫ですか」といっても何も喋らない。そしたらそれが韓国と台湾の人なんです。日本語が通じないわけなんですよ。そんな話もありました。

秋田にマリア像というのがあります。木彫りの像が雨が降ったり気圧が変わると自然に涙を流す像があるらしいんです。私は秋田にいて知らなかったんですけれど、今それに韓国からものすごい人がツアーを組んで来ているんですね。そういう形では微増ですけれど、少しずつ今増えています。

もう一つ、私どもが一番力にしているのが・・、いくら韓国・中国に売り込んでいっても秋田の場合空港は１週間のうち３分の２、いわゆる２日か３日は猛吹雪で飛行機が降りられないんです。「ではどこを？」ということです。それを表日本の岩手の花巻空港に秋田県でお願いしているということなんです。大変力強く思っています。それと後は若干青森。新幹線が今度は盛岡から八戸に開業しまして、今「はやて」が走っています。修学旅行というのは２年前に発生します。ですから今現在20年の修学旅行がドンドン入ってきています。もう来年はグリーン期は入りません。もう来年から再来年の流れは違います。前は盛岡で降りてバスで私どものほうへ入ってきたんです。ところが「はやて」で八戸に行って、八戸から十和田湖をかけて八幡平をかけてこっちへ下りてくるんですね。八幡平の所で私どもの秋田県側へ来る学校、それから岩手県側に降りてくる学校、大体、今のところ半分くらいです。流れとしては良い流れだなと思っているんです。

ですから農家はこれからの第二の軸足を都市農村交流の受け入れに、いわゆる都会の子ども達・都会の家族の受け入れに、少しは目を向けて活性化に向けていただきたいと思います。

そんなことで、私ども昭和46年の12月21日に、民宿の許可をいただきました。約10年。軒数も増えました。開業はしたけれども客が来ない。じゃあ、ということで少しリサーチをしたんです。どういうリサーチをしたかというと、いわゆる、都市と農村。勿論そういう言葉は昔からありました。都会いわゆる首都圏の、麹町税務署に税金を納めている法人、上場100社の休暇を調べて貰いました。これは日本余暇開発センターの白石さんという方です。今から15年ぐらい前です。そうしたら首都圏の100社の上場会社のサラリーマンの休暇が4.5日しかないんですよ。4.5日しかない人たちがこの北東北に向かって来ますか？家財道具一切積んで。ヨーロッパなんか最低20日です。フランスなんか50日くらい取るそうです。彼らは休みだっていうと全部車に積んで、南はニースに降りたり北の方に行ったり。そして、大体30日、１ヶ月前後の間に２カ所から３カ所回っていわゆるバカンスを取るそうです。

それで、昨年また、日本の休暇ということで調べさせて頂きました。そうしたら確実に増えています。倍になっています。９日間取っています。ところがその中でどういう使い方をしているかということを調べましたら、海外組が大体25パーセントあるんですね。３分の１近くが外国に行っているんですよ。それを何とか国内の、それも農村のほうに目を向けて貰おうと考えているのが私だけではないと思います。そして活性化に結びつけようと。特に新幹線というのは有効な手段です。これは秋田は通っていなくてミニ新幹線ですが、これから北東北としては絶対強力な武器になります。とにかく今、山手線で切符を買うとこちらへすぐ来るんです。３時間。秋田市でも４時間で行きます。

それともう一つは、修学旅行の規制の話。公立高校の首都圏の学校には規制がかなりあります。例えば千葉県の学校。公立高校は出発してから帰るまで96時間以内に帰らなければいけません。首都圏の場合、いわゆる東京都の教育委員会・公立高校は４泊５日。同じことをしてはダメです。例えば北海道にいて４泊５日、観光名所巡り。これはダメなんです。九州も同じ。京都・奈良の神社仏閣巡りやってもダメなんです。スキー修学旅行で４日間毎日スキーをやってもダメなんです。「それを二つ以上組み合わせなさい」というふうになっています。

よく私どもに来た学校がやったことは、スキーを３日やって４日目には毛越寺か平泉か角館か、その辺を見て帰る。計画上はそういう形でやっていました。それから神奈川県の場合は上限が７万円です。距離が550キロ。ところが、神奈川県秦野市の高校、どう見ても盛岡からでも600キロ近いのですが、田沢湖に来るんですよ。「先生、どうして600キロもあるんですけれど、550キロの距離をクリアしたの？」っていったら「いや、大丈夫なんだよ、出発地を東京駅にした」っていうんです。それだけ彼らは苦労して来ているんです。

もう一つ、行政さんは大変良く知っていると思うんですが、修学旅行なんかは計画書を出して教育委員会の許可をもらわなければ助成って出ませんよね。ところが東京の日野市の高校。４泊５日毎日スキーなんです。金土日月、火曜に帰っていく。金曜日に出てくる時に「明日、教育長に届けてくれ」って用紙を置いてくるそうです。用紙は次の土曜日に届くわけです。ところが土日休みでしょう。月曜日に教育委員会の教育長の机に届くわけで、来て初めて「はい」って見るそうです。「またやられた！」とこう言うそうです。４年続けて来ました。その時の校長が今、東京都の

教育委員をやっています。

だから、こうしてみた場合に「ただ修学旅行が来ました、バスが行った、帰った」ではないんですね。２年前からいろんな意味で切磋琢磨して学校の先生方同士で、・・ヨーロッパの諺に「隣の芝生は青かった」という言葉があります。テレビのドラマにも出ました。学校の先生方も競争があって「隣の学校の修学旅行はどこへ行った、成功したのか失敗したのか」という見方もするそうなんです。その中に私どもも、どっぷり入れさせられて逆に体験学習をさせられました。

それで結論が出たのが「主役はやはり子ども達だった」。マスメディアの通用しない学校の先生の世界にどうやって入っていったかというと、私どもも意識しなかったんですが、こういう事なんですね。「子ども達には理念と哲学を教えること。」いろんな体験があります。漁業体験だと地引き網とか色々ありますね。稲刈り、田植え、草木染め、いろんなのをやります。ところが彼ら、彼女らに理念と哲学を教えて帰した農家があるんです。

一つ例に挙げますと、たとえば林業体験。林業は昭和36年の高度経済成長以後、全然ダメになった産業です。木の値段がドンドン下がっています。特に秋田杉などは大打撃です。でも子ども達には、駄目な産業なら潰せばいいということじゃなく、林業は昭和36年までは隆盛な産業だったということをまず教えるわけです。ダメになった理由も少しはさわりで教えておきながら「林業とは親が植え、子が育て、孫が伐るんだ」と教える。「何年かかる？」と聞くと中学生の子どもでも「100年とか150年」という言葉が出てくるんです。そこのところをまず子ども達に教え込むということです。林業の仕事そのもも教えながら、そのことも覚えてもらって帰す。あるいはワラジ作りをした子ども達。「ワラジは人間が二足歩行した場合、特に日本の国は稲作文化で最初に素足の次にワラジを履いて歩いたんだよ」ということを教えながら、ワラジ作りは「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまたワラジを作る人」。いわゆる黒子に徹することを子ども達に教えて帰します。

そうすると子ども達は、修学旅行の文集に林業をやった子ども達は林業のことを書くわけです。ワラジ作りした子ども達はワラジ作りを書くわけです。「親が植え、子が育て、孫が伐る」あるいは「駕籠に乗る人、担ぐ人～」。するとその文集は、卒業式間近まで先生が時間無いのを割いてようやく作りあげて「はい、これ文集ですよ」って配ります。それを誰が読みます？持って帰ると親やおじいちゃんおばあちゃんが読むんです。たまたま大田区の教育委員あるいは北区の教育委員がそのおじいちゃんだったということです。それで結局、主役は子ども達だったということです。

そんなところの流れが、マスメディアの通用しない世界に私どもが一生懸命やった結果でしょうね。

海が回りを全部取り囲んでいる日本の現状の打開策というより活性化・内需拡大に、この第二の軸足としての都市農村交流が少しでも役に立てばと思います。そういう意味では、日本の高速交通体系は、特に新幹線が通って東京から３時間以内で来られる北東北には、これから最大の武器になると思います。これを活用しない手はないと思います。その表玄関がこの盛岡なんです。

そういうことで、一緒に、共に頑張りたいと思います。

今日はたいへんご静聴ありがとうございました。

「農家民泊の今後について」の会場からの質問に答えて

子ども達に対して誠意を持つことです。

皆さんがホテルに泊まった場合、５分もフロントにいないでしょう。そして部屋に行きますよね。後はほとんど接待するのは仲居さんですよね。そして朝ご飯食べて出ます。

ところがこの農林漁業体験というのは、来ると「いらっしゃいませ、はい、どうぞ」も含めて日中ずっと体験者と一緒にいるわけですよね。ですからその辺のところの意識改革を180度変えて貰いたいんです。

旅館・ホテルだとお金を払う人・貰う人で上下の差が出ますよね。ところが体験民宿だと、勿論お金を払って泊まりますが、体験をお金を払って教えて貰います。大体同等の立場と考えた方が良い。ですから必要以上のもてなし、くつろぎというのはこれは旅館・ホテルでいいんです。農林業体験というのは180度コロッと変えて、体験を目的に来るお客さんと接している体験の時間の方が長いんだということです。

これはファミリーにも通じますが、まずとにかく私たちが農村にいて普通のことを彼らは感激するんですよ。来てみて感激するんですね。

ある時、子ども達に「首都圏の混む交差点に黙って立っているのと、農村の田圃の中に立っているのと、どういう気持ちの違いがありますか」と聞いたんです。そうしたら、首都圏の交差点はあんなところは５分もいやだよー」というんです。あの頃はまだ排ガス規制の前だったんです。とにかく３分立っていたら鼻の穴が真っ黒になっちゃう。どこかに逃げ出したい。穴があったら入りたい。とにかく居たくない。

ところが農村にきて田圃の中はまず黙っていて自分の存在の小ささに気が付くって言うんです。その次には果てしなく夢が広がるというんです。ほとんどの子ども達がいいます。「じゃあ、田圃の中には居たいの？居たくないの？」というと「いや、そこへはずっと居たい」という。そんな大きな違いがあります。ただいる風景、農村の現状の姿で都会の子ども達に対する、今いわれる「癒し」といいますか、精神的なものを落ちつかせる何か媒体があろうかと思います。

ですから「来年来るのか、再来年来るのか」じゃなくて、一生懸命子ども達とお付き合いして、あるいは来ている人たちとお付き合いすることが大事だと思います。